

野外活動実習における小学校教員志望学生の 生きる力と指導意識の変容に関する研究

A Study about change in IKIRU CHIKARA and guidance
consciousness of the university students aspiring to become
primary school teachers in outdoor activity program

枝元 香菜子
(Kanako EDAMOTO)

Abstract:

The purpose of the present study was to investigate the effect of outdoor activity program on the alteration of consciousness and professional growth in university students aspiring to become primary school teachers. The subjects were 37 university students who participated in a four-day outdoor activities program. The IKIRU CHIKARA scale (IKR) developed by Tachibana et al. (2003) was administered before and after program. In the same way, the alteration of consciousness and professional growth as a leader was administered before and after program. After the program, IKIRU CHIKARA was showed significant change ($p < 0.05$). Then, the communication abilities, the cooperative relationship, the safety management abilities and consciousness as a leader increased after the program ($p < 0.05$). The result suggested that outdoor activity program for the university students aspiring to become primary school teachers effected a change of the IKIRU CHIKARA and consciousness as leader.

キーワード : 野外活動実習、生きる力、意識変容、小学校教員志望学生

Keywords : outdoor activity program, IKIRU CHIKARA (zest for living), alteration of consciousness, university student aspiring to become a primary school teacher

1. はじめに

我が国の青少年の現代的課題として、基本的な生活習慣の乱れ、学習意欲や勤労意欲の低さ、コミュニケーション能力が低下していること、社会的自立が遅いことなどが挙げられている¹⁾。とりわけ直接的な体験の不足や対人関係の希薄さについては、大きく危惧されている。

これらの課題を解決するために、「生きる力」の育成、社会体験や自然体験等の重要性が中央教育審議会答申でも指摘されている。平成20

年の小学校学習指導要領の総則には、「集団宿泊活動やボランティア活動、自然体験活動などの豊かな体験を通して児童の内面に根ざした道徳性の育成が図られるように配慮しなければならない」²⁾と記されている。この基本方針は、各教科・領域を貫いており、特に、理科、生活科、道徳、外国語活動、総合的な学習の時間では、体験活動が重視されている。

現在、多くの小学校で自然体験活動・野外活動の実践がされている。また、青少年団体や民

間企業により、小学生を対象とした長期支援体験プログラムが多数実施されている。そのようなプログラムでは自然と触れあい、さまざまな人と人が関わる体験が組み込まれている。しかし、「今後の青少年の体験活動の推進について(答申)」では、「青少年の「生きる力」を育む上で、自然体験をはじめ文化・芸術や科学などに直接触れる体験的な学習活動等の重要性が高まる中、適切な指導者、多様な活動プログラムなどの教育資源は不十分な状態にある」³⁾ことが指摘されている。また、体験活動を指導する教員についても、「教員が、体験活動の意義・効果や実施の際の留意点等を理解し、体験活動に関する指導力を修得できるよう、養成段階や現職段階において、体験活動を実施する際の指導力向上につながる機会を積極的に設ける必要がある」³⁾と述べられている。これに加え、体験活動を通して、「生きる力=①自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する能力、②自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性 ③たくましく生きるための健康や体」を育むにあたり、指導者となる教師がこれらの資質能力を身に付けておくことは極めて重要である。よって、子どもたちの学びをより効果的なものにするためには、教員の「生きる力」の向上や体験活動に対する指導力向上は急務である。

これまでの先行研究では、子どもを対象とした自然体験活動の効果や「生きる力」の育成に関する報告が多く^{4)、5)、6)}、指導者や教員、教員志望学生を対象とした研究はあまりみられない。また、大学生を対象とした野外活動実習に関する研究は、その多くが実践事例やカリキュラムに関連するもの、あるいは高等教育における生涯スポーツや体育・スポーツ指導者育成の視点での研究である^{7)、8)、9)、10)}。教職志望の中でも、とりわけ小学校教員志望学生を対象とし、指導者の立場での意識変容や成長に特化した研究はほとんどなく、大学で実施されている指導者育成指導の効果を多角的に検討しているものも少ない。現在、教職課程をもつ大学が増

えており、それぞれの大学で独自の野外活動(キャンプ)実習が行われている。そのため、様々な方法で行われている野外活動(キャンプ)実習の効果を調査しデータを蓄積していくことは、極めて重要である。このように、体験活動における指導者の資質向上および意識変化について検証することは、今後の小学校教員や社会教育指導者の養成方法の改善する上で大きな意義を有すると考えられる。

そこで本研究では、野外活動の演習を行う「レクリエーションの理論と方法」の授業を通して、小学校教員志望学生の「生きる力」の変化を把握するとともに、指導者としての意識変容について検討することを研究の目的とした。

2. 方法

(1) 対象者

調査の対象は、A大学児童教育学科第2学年のうち、「レクリエーションの理論と方法」を受講した小学校教員志望学生37名とした。男女の内訳は、男子17名、女子20名であった。研究実施にあたり、授業実施者および本人に研究目的・方法を説明した上、研究協力の同意が得られた学生のみを研究対象とした。

(2) 授業内容

「レクリエーションの理論と方法」は、青少年自然の家で行われる3泊4日の野外活動演習と大学での事前・事後指導の計6日間で構成されている。この授業を通して、野外活動やレクリエーション活動に対する実践的指導力の基礎を養うことをねらいとしている。そのため、野外活動の現場において、学生自らが試行錯誤をしながら指導方法を探究することに焦点をあてている。単なる理論や実技的な体験活動ではなく、自ら模索する体験活動の中で、リーダーシップやボランティアシップを基盤とした実践的指導力を培うことを目的とした授業が行われた。表1に授業内容の一覧を示す。

6日間通じ、基本的には5～7名で構成された班で活動を行った。今回の演習では、話し合い活動を通して各自の意見を出し合い、様々な工夫を重ねて課題解決を行うことを目的とした

表1 「レクリエーションの理論と方法」授業内容一覧

| | | |
|-------------------------------|------------|---------------------------------------|
| ◆大学における講義（事前指導） | | |
| 9月8日 | 講義 第1回 | 全体オリエンテーション |
| | 講義 第2回 | 学習指導要領と自然の中での集団宿泊活動 |
| | 講義 第3回 | 野外活動の理論とキャンプの歴史 |
| | 講義 第4回 | ボランティア活動と青少年赤十字の指導原理 |
| | 講義 第5回 | 安全管理・バス内プログラムの方法と演習 |
| ◆国立信州高遠青少年自然の家における講義と演習（3泊4日） | | |
| 9月14日 | 演習 第1回 | バス内プログラム演習 |
| | 講義 第6回 | レクリエーション指導者の役割とグループワーク |
| | 演習 第2回 | レクリエーションゲームの理論と実際 |
| | 講義 第7回 | リーダーシップの心理 (第1日の学習活動の振り返り) |
| 9月15日 | 演習 実踏 | ショートハイキング（翌日の早朝ご来光ハイキングの事前踏破） |
| | 演習 第3回 | グループごとに課題の計画立案 |
| | 演習 第4回 | キャンプファイヤーのためのスタンツ演習 |
| | 演習 第5・6回 | 課題演習①（オリエンテーリング演習） |
| | 演習 第7回 | 課題演習②（キャンプファイヤー演習） (第2日の学習活動の振り返り) |
| | 演習 第8・9回 | 課題演習③（野外炊飯演習） |
| 9月16日 | 演習 第10・11回 | 課題演習④（グリーンアドベンチャー演習） |
| | 演習 第12回 | 課題演習⑤（ゲーム大会①演習） (第3日の学習活動の振り返り) |
| | 演習 第13・14回 | 課題演習⑥（ゲーム大会②演習） (第4日の学習活動の振り返り) |
| ◆大学における講義（事後指導） | | |
| 9月18日 | 講義 第8・9回 | 科目全体のまとめ |

グループワークが組み込まれており、6つの課題演習について、各班が1つの演習課題を担当し企画・立案・実践を行った。

授業を行う上での共通認識として、学校現場でも多く取り入れられており、少年赤十字のリーダーシップトレーニングセンターの運営方針である「先見（朝、一人で一日の活動を見つける）」「5分前行動」「気付き、考え、実行する」の3つを念頭におき、活動をするよう指導がなされていた。

(3) 調査項目と手順

研究への同意が得られた学生を対象に、橘ら¹¹⁾の「生きる力」(IKR)の評定用紙¹²⁾の原尺度をもとに行政法人国立青少年教育振興機構が作成した「生きる力 (IKR) 評定用紙簡易

版：以下、IKR評定用紙」(28項目、6件法)¹²⁾を授業前後で実施した。IKR評定用紙は、心理的社会的能力・徳育的能力・身体的能力の3つの上位尺度及び14の下位尺度から構成されている。また、実習による学生の変容を詳細に把握するために、林ら(2002)¹³⁾の研究で効果検証されている教職志望学生対象研修会の効果に関する26項目(自然に対する知識、説明や指導、子どもへの対応、野外活動、集団の教育機能、とっさの判断・不測の事態への対応など)について調査を行った。さらに実習目的の達成度および実習全体を通して気持ちの変化、バス内レクリエーション、室内レクリエーション、オリエンテーリング、グリーンアドベンチャー、ハイキング(登山)、野外炊飯等、各プログラムの企画・運営に関する自己評価に

についても質問紙調査を実施した。

(4) 算出方法、統計処理

IKR評定用紙に関しては、国立青少年支援機構の「生きる力」測定・分析ツールを用いて実習前後での対応のあるt検定を行った。それ以外の項目についての統計処理には、Predictive Analytics Software (SPSS Statistics version 21.0, IBM社製)を用いた。事前事後における変数の比較には、対応のあるt検定を実施した。統計量は全て平均値±標準偏差で示した。教師志望学生研究会の効果に関する26項目は、林ら(2002)の研究に倣って、因子分析(主因子法)をした後、各因子合成得点を算出し前後比較を行った。ただし、因子の抽出は固有値が1.0以上のもので、より単純構造を目指すために各項目のうち、因子負荷が0.4に満たない項目を削除し、再び因子分析を行った。因子数はスクリープロットにより判断し、プロマックス回転を行った。参加学生の実態については、今までの野外活動および引率者(学生リーダー等)経験回数と次週前における自己評価との関連性については、Pearsonの順位相関係数を算出した。検定の有意水準は5%未満とし、p値が5%未満の時に有意とした。

3. 結果

(1) 参加学生の実態

事前アンケートにおいて、今までの野外活動の経験回数およびそのうち引率者(学生リーダ

ー等)として参加した回数について調査した結果を図1に示す。今回、授業に参加した学生37名のうち11人が初めてであった。3回目と回答した学生は13名で最も多く、6回以上経験している学生は8名いた。また、引率者経験に関しては3分の1の学生が2回以上の経験を有していた。

野外活動および引率者経験回数と実習前の各プログラムの企画・運営に関する自己評価に関連性があるか分析した結果、引率者経験回数と野外炊飯との間のみ到低い正の相関が認められた($r = 0.335, p = 0.042$)が、そもそものキャンプ回数を考慮した関係性を検討した結果、有意な結果は認められなかった($r_{xy \cdot z} = 0.288, p = 0.085$)。

(2) 「生きる力」の変容

IKR評定用紙にて得られた結果について、「生きる力」測定・分析ツール(国立青少年支援機構)を用いて調査前後での対応のあるt検定を行った。質問紙の記入漏れがあったため、有効回答数は35人分であった。その結果、「生きる力」に加え、上位尺度である「心理的社会的能力」、「徳育的能力」、「身体的能力」すべてにおいて、授業前に比べ授業後に有意に高値を示した($P < 0.01$: 「生きる力」、「心理的社会的能力」、 $P < 0.05$: 「身体的能力」)(表2)。

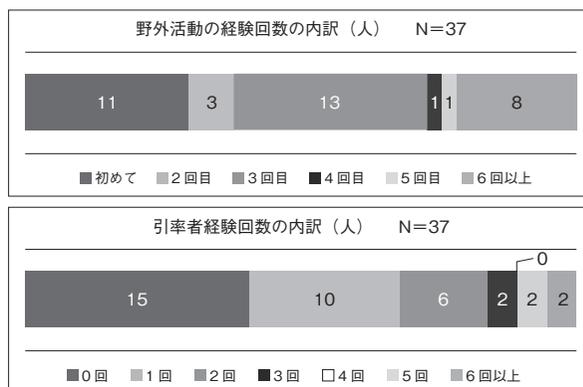


図1 野外活動および引率者経験回数

表2 「生きる力」の変容

| | 事前 | 事後 | P値 |
|----------|--------------|----------------|--------|
| 生きる力 | 118.2 ± 21.1 | 124.5 ± 22.3** | 0.0003 |
| 上位尺度 | | | |
| 心理的社会的能力 | 59.1 ± 11.6 | 61.2 ± 12.3* | 0.0286 |
| 徳育的能力 | 34.8 ± 5.8 | 37.5 ± 6.2** | 0.0000 |
| 身体的能力 | 24.3 ± 5.8 | 25.9 ± 5.7** | 0.0020 |

平均±標準偏差 **p < 0.01, *p < 0.05

(3) 実習を通して期待できる効果の検証

教職志望学生対象研修会の効果に関する26項目について因子解析を行った結果、解釈可能な以下の6因子(21項目)が抽出された。因子負荷と各因子の内的整合性の検討として算出されたクロンバックの α 係数を表3に示した。第1因子(4項目)は、「どんな子どもにも気軽に話が出来る」、「子どもの意見をよく聞いて話し相手になることができる」、「道具などの使い方を他人に説明するのが得意である」、「人前で自分の意見をはっきり言える」などで負荷量が高く、「コミュニケーション能力」に関わる因子とした。第2因子(4項目)は、登山・キャンプ・野外での火おこしや炊事の技術や知識および集団に対するゲーム指導などに関する自信で負荷量が高く、「野外活動の技術」に関わる因子とした。第3因子(3項目)では、樹木や草木、虫や動物に関する知識と野外スポーツに関する知識について負荷量が高く、「動植物やスポーツに関する知識」に関わる因子とした。第4因子(3項目)は仲間との協力に関する事項で、第5因子(4項目)は天候不順や突発的な事柄への対応で、第6因子(4項目)は危険把握や怪我の対応、場面での適切な対応で負荷量が高く、それぞれ「仲間との協力関係」、「不測の事態への対応」、「安全管理や適切な対応」に関する因子とした。

得られた6因子について、因子ごとに合計した得点を項目数で割って、実習前後の因子合成得点を算出し、対応のあるt検定を行った。その結果を表4に示す。「コミュニケーション能力」および「仲間との協力関係」、「安全管理や適切な対応」については、実習後の値が実習前

の値に比べ有意に高くなった。そのほかの因子については、有意な差は認められなかった。

(4) 自己評価および気持ちの変容

各プログラム(バス内レクリエーション、室内レクリエーション、オリエンテーリング、グリーンアドベンチャー、ハイキング(登山)、野外炊飯)における企画・運営についての変容を検証した結果、すべての項目で事後の値が有意に高値を示した(表5)。

また、実習を通して気持ちの変化があったか把握するため、田中ら(2006)¹⁴⁾らの研究をもとに①これまで以上にボランティア等に参加しようと思った、②小学校の先生になりたいと思った、③キャンプ(野外実習)は、もう行きたくないと思った、④指導法を勉強しようと思った、⑤自然のすばらしさが分かった、⑥就職希望職種が変わった、⑦もっと頑張らないといけないと思った、⑧特になし、⑨その他(自由記述)についての質問紙調査(複数回答可、項目別回答総数に対する割合として表記)を行った。その結果、78%近くの学生が実習を通してもっと頑張らないといけないと感じていた。また、57%の学生が指導法を勉強しようと思った、46%の学生が自然の素晴らしさが分かったと回答した。さらにボランティアへの参加や教員志望に対する気持ちについても30~40%の学生で高まったことが示された。その他(自由記述)の中には、「事前準備をもっとしっかりと行おうと思った」、「自己評価が変わった」、「改めて子どもに関わることができる仕事につきたいと思った」、「計画・実行の難しさを強く感じた」という回答が見られた。

表3 因子分析結果

| 項目名 | I | II | III | IV | V | VI |
|--|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| <u>I. コミュニケーション能力 ($\alpha = 0.853$)</u> | | | | | | |
| どんな子どもにも気軽に話ができる | 0.912 | 0.016 | -0.023 | -0.087 | -0.035 | -0.058 |
| 子どもの意見をよく聞いて話し相手になることができる | 0.825 | -0.190 | -0.079 | 0.001 | -0.037 | 0.308 |
| 道具などの使い方を他人に説明するのが得意である | 0.703 | -0.102 | 0.090 | 0.378 | -0.055 | -0.005 |
| 人前で自分の意見をはっきり言える | 0.682 | 0.222 | -0.079 | -0.173 | 0.373 | -0.205 |
| <u>II. 野外活動の技術 ($\alpha = 0.843$)</u> | | | | | | |
| 登山の技術や知識に自信がある | -0.300 | 0.799 | 0.237 | 0.058 | 0.063 | -0.068 |
| キャンプの技術や知識に自信がある | 0.091 | 0.757 | -0.080 | -0.053 | -0.002 | 0.278 |
| 野外での火おこしや炊事の技術や知識に自信がある | 0.003 | 0.724 | 0.176 | -0.042 | 0.023 | 0.135 |
| 集団にゲームなどの指導をするのが得意である | 0.412 | 0.418 | -0.184 | 0.343 | -0.019 | -0.074 |
| <u>III. 動植物やスポーツに関する知識 ($\alpha = 0.879$)</u> | | | | | | |
| 樹木や草花についての知識に自信がある | -0.124 | 0.107 | 1.033 | -0.043 | 0.000 | -0.226 |
| 虫や動物についての知識に自信がある | 0.061 | -0.042 | 0.837 | -0.047 | 0.429 | -0.195 |
| 野外スポーツの技術や知識に自信がある | -0.016 | 0.220 | 0.547 | 0.264 | -0.041 | 0.073 |
| <u>IV. 仲間との協力関係 ($\alpha = 0.815$)</u> | | | | | | |
| 仲間と協力した活動を通じて様々なことが得られる | -0.259 | -0.019 | -0.020 | 0.902 | 0.095 | 0.085 |
| 仲間と協力して生活や活動をするのは楽しい | 0.273 | -0.034 | -0.029 | 0.896 | 0.056 | -0.292 |
| 自分の技能や知識を他人のために役立てたい | 0.269 | -0.225 | 0.033 | 0.454 | 0.121 | 0.128 |
| <u>V. 不測の事態への対応 ($\alpha = 0.888$)</u> | | | | | | |
| 天候変動に柔軟に対応できる | -0.135 | -0.136 | 0.161 | 0.056 | 0.773 | 0.218 |
| 突発的な事柄にも落ち着いて対応できる | 0.143 | 0.159 | -0.060 | 0.167 | 0.662 | 0.022 |
| 自然の中では天候が急に変わった場合のことを常に考えて行動できる | 0.014 | 0.212 | -0.032 | 0.035 | 0.598 | 0.334 |
| <u>VI. 安全管理や適切な対応 ($\alpha = 0.825$)</u> | | | | | | |
| 子どもに適切な生活や活動等の指導ができる | 0.028 | 0.126 | -0.319 | -0.140 | 0.183 | 0.883 |
| 今まで出会ったことのない場面でも適切な対応ができる | -0.159 | 0.123 | -0.030 | 0.256 | 0.353 | 0.538 |
| 子どもが怪我した場合の対応の仕方を知っている | 0.114 | -0.014 | 0.362 | -0.058 | -0.016 | 0.494 |
| キャンプ生活で予想される危険を沢山あげることができる | 0.196 | 0.352 | 0.293 | -0.110 | -0.115 | 0.456 |

表4 各因子における実習前後での変容

| | 実習前 | 実習後 | P値 |
|---------------------|-------------|---------------|-------|
| I. コミュニケーション能力 | 2.84 ± 0.79 | 3.07 ± 0.57* | 0.012 |
| II. 野外活動の技術 | 2.04 ± 0.93 | 2.26 ± 0.84 | 0.107 |
| III. 動植物やスポーツに関する知識 | 1.92 ± 1.01 | 2.06 ± 1.00 | 0.251 |
| IV. 仲間との協力関係 | 3.21 ± 0.68 | 3.57 ± 0.46** | 0.001 |
| V. 不測の事態への対応 | 2.43 ± 0.93 | 2.70 ± 0.78 | 0.055 |
| VI. 安全管理や適切な対応 | 1.61 ± 0.65 | 1.84 ± 0.55* | 0.038 |

平均 ± 標準偏差 **p < 0.01, *p < 0.05

表5 各プログラムの企画・運営に関する自己評価

| | 事前 | 事後 | P値 |
|-------------|-----------|-------------|-------|
| バス内レクリエーション | 3.5 ± 1.0 | 3.8 ± 1.0* | 0.033 |
| 室内レクリエーション | 3.5 ± 1.0 | 4.1 ± 0.7** | 0.000 |
| オリエンテーリング | 3.2 ± 1.0 | 3.6 ± 0.8* | 0.030 |
| グリーンアドベンチャー | 3.1 ± 1.0 | 3.8 ± 0.8** | 0.000 |
| ハイキング（登山） | 3.1 ± 1.0 | 3.6 ± 0.9** | 0.001 |
| 野外炊飯 | 3.4 ± 1.1 | 3.9 ± 1.0** | 0.000 |

平均±標準偏差 **p < 0.01, *p < 0.05

表6 実習後における気持ちの変容

| 質問項目 | 人数（人） | 人数比（%） |
|--------------------------|-------|--------|
| これまで以上にボランティア等に参加しようと思った | 14 | 38 |
| 小学校の先生になりたいと思った | 11 | 30 |
| キャンプ（野外実習）は、もう行きたくないと思った | 1 | 3 |
| 指導法を勉強しようと思った | 21 | 57 |
| 自然の素晴らしさが分かった | 17 | 46 |
| 就職希望職種が変わった | 0 | 0 |
| もっと頑張らないといけないと思った | 29 | 78 |
| 特になし | 0 | 0 |
| その他 | 5 | 14 |

4. 考察

今回、IKR評定用紙を用いて実習前後での「生きる力」を検証した結果、全体的な「生きる力」に加え、上位尺度である「心理的社会的な能力」、「徳育的能力」、「身体的能力」の3項目全てにおいて有意な変化が認められた。瀧ら（2005）⁴⁾は小学生を対象とした5泊6日のキャンプにおいて「生きる力」が向上することを報告しており、キャンプ経験は子どもたちの成長に多様な効果を及ぼすものであると考察している。また、中川ら（2005）⁵⁾は、「生きる力」の向上は短期キャンプに比べ長期キャンプで著しいことを述べており、橘ら（2005）¹¹⁾は、自然の厳しい環境の中で、克服的で冒険的な活動プログラムを含むキャンプのほうが「生きる力」の向上に効果的であると報告している。本研究で取り上げたのは、小学校教員志望学生を対象とし、野外活動やレクリエーション活動に対する実践的指導力の基礎を養うことをねらい

とした実習であった。対象や目的が先行研究と異なる自然体験活動であったが、先行研究と同様に「生きる力」の向上が見られた。体験活動の意義として、現実の世界や生活などへの興味・関心、意欲の向上、問題発見や問題解決能力の育成、思考や理解の基盤づくり、教科等の「知」の総合化と実践化 知識や理解、自己との出会いと成就感や自尊感情の獲得、社会性や共に生きる力の育成、豊かな人間性や価値観の形成、基礎的な体力や心身の健康の保持増進が挙げられており、これらによって「生きる力」の育成が目指されている¹⁵⁾。また、体験活動は「なぜ、どうしてこうなんだろう」「どうしたらいいのだろう」という「問いかけ」を通して、「こうなんだ」「こう考えたらいい」「こうしたらいい」という知識、技能、考え方とつながり、「確かな学力」へと実を結ぶ。さらに体験活動から確かな学力人の筋道を、集団宿泊体験を軸にみていくと（1）ことばとコミュニケー

ション、(2)心の教育、(3)人間関係、集団的能力、(4)心身の健康と安全な生活、(5)生活の技能、(6)自然を見る眼、(7)社会を見る眼、(8)自分を見る眼の側面が挙げられると言われている¹⁶⁾。このことから、今回の変化については、大学を離れ日常とは異なる場所で集団生活を送ったことや様々な野外活動の企画・実践したこと、そして何よりも同じ目的をもった仲間と指導者の目線から演習課題に取り組むと同時に自己について見つめなおす機会になったことが大きく影響しているのではないかと推察できる。

実習を通して得られる効果については、先行研究に基づいて質問調査項目26項目を因子分析した結果、「コミュニケーション能力」、「野外活動の技術」、「動植物やスポーツに関する知識」、「仲間との協力関係」、「不測の事態への対応」、「安全管理や適切な対応」の6因子が抽出された。これらの因子について実習前後で比較検討をしたところ、「コミュニケーション能力」および「仲間との協力関係」、「安全管理や適切な対応」の3因子について実習後に有意に高値を示した。先行研究では、「集団活動やその指導の自身」、「自然に対する理解と不測の事態への対応」、「野外活動の技術」、「仲間との協力関係」、「子どもに対する接し方」の5因子が抽出されているが、今回は少し異なる結果となった。先行研究は、国立青少年教育施設主催の研修会での調査であり、野外活動を通じて、学生自らの野外体験を積むとともに、自然や子どもとの触れ合いを深め、児童理解や教員としての資質向上を図っている。しかし、本研究は大学の授業を取り上げており、様々な野外活動のプログラムを1から自分たちの手で企画・立案し、実践していくことが主目的となっている。また、児童と一緒に活動を行うことはなかったことも先行研究との大きな違いの一つであると考えられる。本プログラムは、役割分担・安全管理はどうするのかなど常に班で話し合う活動が多く、またオリエンテーリングやグリーンアドベンチャー、野外炊飯など実際の活動の中でも仲間と協力して課題解決する場面が多かったことなどから、「コミュニケーション能力」お

よび「仲間との協力関係」、「安全管理や適切な対応」において有意な変化が見られたと考えられる。

一方、「野外活動の技術」や「動植物やスポーツに関する知識」では全体的に事前の得点が低く、実習後にも変化が見られなかった。その理由として、各プログラムには全員が参加しているものの、全ての活動の企画・立案・実践を全員が経験したわけではなく、班ごとに1つ課題演習を担当したことが挙げられる。各プログラムに関する自己評価では、全項目とも統計的有意差が認められた。しかし、「企画・運営ができる」という質問に対してほとんどの項目の平均値が4.0(ある程度あてはまる)未満であり、自信をもって取り組むにはまだまだ課題があると考えられる。先行研究^{13)・17)}では、野外活動の技術に関する自己評価の低さが取り上げられており、教職志望学生の生活体験の不足や野外活動体験が必ずしも豊かでないことが述べられている。このことから、野外活動の指導者としての資質・能力を育むためにも、今後は限られた時間の中で、一人一人がより多くの活動に携われるような授業づくりが必要であると考えられる。

実習を通しての気持ちの変化では、「もっと頑張らないといけない」と回答した学生が多数みられ、次いで「自然の素晴らしさが分かった」、「指導法を勉強しようと思った」、「これまで以上にボランティア等に参加しようと思った」、「小学校の先生になりたいと思った」の順で高い値となった。これらについては、順番の多少の違いはあるが、先行研究¹⁴⁾と類似した結果となった。何について頑張ろうと思ったのかまでは回答を求めているため把握することはできないが、実習を通して一人ひとりが自己の課題を発見し、それを克服していこうという気持ちを持つことができたと考えられる。また、今回の野外実習を通して、その重要性や必要性を理解したことで、「指導法を勉強しようと思った」、「今まで以上にボランティア等に参加しようと思った」、「小学校の先生になりたいと思った」などの気持ちが高まったと考えられる。環境教育・野外教育に対する興味・関心や

自然体験活動に関する知識・技術、子どもと関わるための知識・技術など様々な資質を身につけていけるようにするためには、指導者自身が常に自然体験活動に親しみ、自然の中で学び続ける姿勢を忘れないことが大切であると言われて¹⁸⁾。実習後に半数近くの学生が「自然の素晴らしさが分かった」と回答したことから、日常とは異なる大自然の中で様々な活動することは、自然活動の親しみ方やその中で学び続ける姿勢の育成に効果的であることが示唆された。

田中ら(2006)¹⁴⁾は、組織キャンプの効果は小学生だけでなく、自然学校に参加する指導補助員にも及んでいることを報告しているが、本研究において生きる力の向上や自然の素晴らしさの実感、自己課題の発見、指導者としての意識向上などの成長が認められたことにより小学校教員志望学生を対象とした野外活動実習も効果的であることが示された。今後も教職課程における体験活動を大切に一人ひとりの「生きる力」の向上を図るとともに、子どもたちにより良い指導を提供できるような野外活動実習を継続していく必要があると考えられる。教員に求められる資質自体が、「生きる力」の「変容」に対応し変化しており、教員養成の目指すべき教師像は、「生きる力」同様に多義的であることを踏まえると、個々の大学が、目指す教師像を丁寧に吟味し、その目指す教師を育成するためには、どのようなカリキュラム内容がふさわしいのか明確にすることが求められている¹⁹⁾。このことから、「生きる力」の育成との関連が強い体験活動に焦点を当てて、更なる研究を進めていくことは極めて重要になってくる。

5. まとめ

本研究では、「レクリエーションの理論と方法」の授業における3泊4日の自然活動実習が、小学校教員志望学生の意識変容および成長に及ぼす効果について検証し、以下のことが明らかになった。

1) 実習をとおして「生きる力」の向上が認め

られた。また、上位尺度である「心理的社会的能力」、「徳育的能力」、「身体的能力」においても向上した。

2) 実習に期待される効果として、「コミュニケーション能力」、「野外活動の技術」、「動植物やスポーツに関する知識」、「仲間との協力関係」、「不測の事態への対応」、「安全管理や適切な対応」という6側面があることが因子分析で明らかになった。今回の実習の効果を検討した結果、とりわけ、「コミュニケーション能力」、「仲間との協力関係」、「安全管理や適切な対応」についての向上に有効であったことが示唆された。

3) 課題演習を経験することで、実習後にはそれぞれの活動に対する自己評価の向上が認められた。また、実習を通して、自然の素晴らしさの実感や自己課題の発見、指導者としての意識向上などの成長が認められた。

本研究の結果は、野外教育の効果を論ずる際によく言われている1自己の成長、2自然認識、他者と交わる能力²⁰⁾に一致しただけでなく、指導者としての意識変容や成長も感じられた。ゆえに、大学の授業として実施された今回の野外活動実習は、教員志望学生に自己の成長のみならず指導者としての成長にも効果的であることが示唆された。

学校での体験活動は、沢山の人間との協働によって実践されることが多く、それぞれの持ち味を活かしながら、効率のよい運営組織を編成し、大きな力を生み出していくことが重要なポイントであると言われて¹⁸⁾。そのためにも、大学において野外活動の技術だけでなく、教員志望学生の「生きる力」や体験活動に対する指導者としての意識もしっかりと高めておくことは重要である。

本研究で得られた結果は、大学教員養成課程での自然体験活動の重要性を強調するとともに、今後の小学校教員や社会教育指導者の養成方法の改善する上での一助となることを期待したい。しかし、本研究の課題として、対象としている人数が少ないことや特定の授業でしか検証していないこと、男女間の差まで詳しく検討

していないことなどが挙げられる。今後は人数を増やし、男女間や過去におけるキャンプ経験による違いについても検証していきたいと考えている。

【引用文献一覧】

- 1) 独立行政法人国立青少年教育振興機構、第1章「学校教育における体験活動の意義」、「学校で自然体験活動をすすめるために—自然体験活動指導者養成講習会テキスト—」、(独立行政法人国立青少年教育振興機構、東京)、p.8 (2010)
- 2) 文部科学省、第1章 総則、「小学校学習指導要領」、(東京書籍、東京)、p.13, (2009)
- 3) 中央教育審議会、第3章 青少年の体験活動を推進するための取組について、「今後の青少年の体験活動の推進について(答申)」、(文部科学省)、pp.16-17 (2013)
- 4) 瀧直也、平野吉直、寺沢宏次、キャンプが子供の脳活動と「生きる力」に及ぼす影響、国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要、5、45-55 (2005)
- 5) 中川もも、岡村泰斗、黒沢毅、荒木恵理、米山絵里、長期・短期が小中学生の生きる力に及ぼす効果、野外教育研究、8(2)、31-43 (2005)
- 6) 茂呂 輝夫、自然体験活動と生きる力の関連性—オースタムキャンプの参加群と対照群との比較—、独立行政法人国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター紀要、3、100-108 (2014)
- 7) 田井健太郎、熊谷賢哉、宮良俊行、金相勳、宮原恵子、谷木龍男、水野哲也、大学における野外実習の効果について—高等教育における身体教育あるいはフィットネス教育の基礎として—、長崎国際大学論叢、12、15-23 (2012)
- 8) 中村哲士、小柳好生、保井俊英、体育系女子大学におけるキャンプ実習の効果に影響を与える普遍要素の探求、健康運動科学、3(1)、19-32 (2013)
- 9) 高山昌子、大学生の組織キャンプの効果に関する一考察、太成学院大学紀要、11、85-95 (2009)
- 10) 江川潤、富永修一、鈴木勝彦、井上忠夫、全員参加型キャンプ実習の運営に関する一考察—10年間の順天堂大学スポーツ健康科学部を事例として—、順天堂大学スポーツ健康科学研究、3(4)、235-244 (2012)
- 11) 橋直隆 平野吉直 関根章文、長期キャンプが小中学生の生きる力に及ぼす影響、野外教育研究、6(2)、45-56 (2003)
- 12) 独立行政法人国立青少年教育振興機構、VI. 調査に必要な資料、「事業評価に使える!「生きる力」の測定・分析ツール」、(独立行政法人国立青少年教育振興機構、東京)、pp.46-47 (2010)
- 13) 林幸克、谷井淳一、青少年教育施設における教職志望学生対象研修会の現状と課題、国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要、2、31-39 (2002)
- 14) 田中利明、矢部京之助、自然学校における指導補助員の教育的効果について、野外教育研究、10(1)、49-58 (2006)
- 15) 文部科学省初等中等教育局、「体験活動事例集」、(ぎょうせい)、(2002)
- 16) 児玉邦宏、「確かな学力をはぐくむ学校力」、(ぎょうせい)、(2007)
- 17) 青木康太郎、彌川道子、キャンプ体験が教職志望学生の自然体験活動の指導力に及ぼす影響、北翔大学北方圏生涯スポーツ研究センター年報、3、21-28 (2012)
- 18) 独立行政法人国立青少年教育振興機構、第1章「学校教育における体験活動の意義」、「学校で自然体験活動をすすめるために—自然体験活動指導者養成講習会テキスト—」、(独立行政法人国立青少年教育振興機構、東京)、pp.18-19、(2010)
- 19) 布村育子、「生きる力」の変容と教員養成の課題、埼玉学園大学紀要 人間学部篇、8、107-117 (2008)
- 20) 松村純子、生きる力を育む、長期自然体験プログラム『妙高キッズアドベンチャー』～「発見」をねらいとした効果的な活動プログラムをめざして～、国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要、1、55-64 (2001)